●海外引揚者が語り継ぐ労苦

# 純　子！

# 純子！

岩手県　阿部とし

私は昭和十六（一九四一）年一月に、軍人だった阿部忠孝と結婚してすぐに、その夫と共に北満の牡丹江（ボクンコウ）を経て、ソ連との国境に接している虎林（コリン）県の虎頭（コトウ）という町に駐屯する、第三九五部隊の将校官舎に赴任しました。周囲は見渡す限り広漠とした原野で、今まではただ漠然とした思いしか持っていなかった大陸というものを初めて知り、肌で感じ取りました。そこには、兵営と官舎の他に、日用品を売っている酒保と海産物を取り扱っている店があるだけでした。官舎は、部隊長級の方々の官舎が横並びに三列あり、次いで中隊長級の方々の官舎がその後ろに三列と、おおむね階級順に配列されていました。鉄筋コンクリート造りの二階建てで、ベランダが広かったのが印象に残っています。当時、内地ではあまり見掛けられない近代的なつくりでした。

私たち夫婦の入った官舎の間取りは、八畳、六畳、四畳半の三部屋で、それに炊事場、風呂場、便所がついていて、新婚家庭では広々としていてもったいないような家でした。便所にはスチーム暖房が通っていて便利でしたが、ただ炊事と風呂の燃料が石炭でしたので、なかなか思うようにいかずに、

火起こしに不慣れな私は、最初の頃は火加減が分からずにいつも黒焦げのご飯ばかり作っていました。

ただ一つの楽しみは、虎頭の市街に行っていろいろと満人の店を見て回ったり、飯店で食事をすることでしたが、とても私一人ではどこにも行けませんでした。周辺の要所要所には歩哨が立っておりました。野原に出掛けて、ヨモギやアカザなどの食べられる野草を摘みに行き、それをおひたしにして食べたり、ときにはワラビを取り、それを折ってそのまま食べたこともありました。満州の原野を大いに楽しんでいました。

昭和十七年になると、大東亜戦争の戦局も厳しくなってきたので、主人の所属する部隊では家族を内地に帰すということになり、官舎を引き払って内地に戻りました。官舎から一緒に行動していた新潟県に行かれる方と再会を約束して、東京駅で別れて一人で主人の実家の岩手に帰り着きました。主人の弟は、海軍で南方に出征していて、家では母一人で留守を守っていました。私は母の農作業を手伝って過ごしましたが、母も随分と喜んでくれました。

しかし、主人からの連絡で昭和十八年の夏に虎頭に戻ることとなり再度渡満しましたが、その頃になると内地では物資不足の情勢となりました。統制経済が強化されて、全ての日用品や食料品、それに衣料が配給制になって、国民は皆「欲しがりません、勝つまでは」と、悲壮な決意で日常生活を過ごしていました。だが、こちら満州ではまだ配給制ではなく、日常生活に必要な物は比較的自由に買うことができました。

私が虎頭に戻って間もなく、南方に行っていた弟が戦死したという公報が母のもとに届いたと、実家から連絡がありました。母の悲しみはどんなだったか、さぞつらいことだったろうと思うと、私も涙があふれてきて眠れませんでした。

虎頭では、まだ毎日を平穏に過ごしていましたが、その間にも南方での日本軍の戦いは熾烈を極めてきていました。戦域はじりじりと押し迫ってきて、「全員玉砕」という報道が相次いで伝わってきました。虎頭の部隊にも命令が出て、国境地帯から牡丹江方面に移動することとなり、そしてさらに後方の興隆（コウリュウ）から掖河（エキカ）に後退して陣地を構築することになりました。

その頃、私は結婚五年目で初めて妊娠して、昭和二十年七月十五日に牡丹江の満鉄病院で、女の子を無事に出産しました。主人もとても喜んでくれて、部隊への行き帰りには病院に立ち寄って、赤ん坊を抱いていました。私もその様子を横で見ていて、幸福感をしみじみと味わっていました。名前は、「純子（すみこ）」と名付けました。付き添いをして下さったのは朝鮮人の方でしたが、とても優しい人でした。たしか桃原さんという五十歳ぐらいの方でした。

退院して間もなくの八月九日に、ソ連軍は満ソ国境を不意、不法に越境して、怒涛のごとき勢いで満州国内に侵入してきました。私は、おむつなどの洗濯物を外に干すこともできずに、押し入れの中に純子を寝かせて荷物の整理を始めました。

牡丹江の市街は、ソ連の飛行機によって爆撃されて戦場と化してしまいました。主人の部隊も、残

留者と前線に出て行く者とに分かれましたが、主人は残留部隊の一員となりました。しかし、家族は全員で鏡白湖（キョウハクコ）の山奥にある陣地に避難することになり、生まれてまだ一カ月しかたっていない純子を胸のところにくくりつけて、リュックサックにおむつと着替えをぎっしり詰め込んで背負い出発しました。主人との別れは、悲しくて涙が止めどもなく流れてしまいました。「どうか最後まで頑張って生きて下さい」と泣きながら言いました。泣き別れの一場面でした。

避難のために用意されたトラックに、部隊長の奥様以下約五十人の家族が三台に分乗して、八月十一日の夜九時頃に、闇の中を走り出しました。トラックの上では、赤ちゃんや小さな子供たちの泣き叫ぶ声と、それに輪をかけるような母親たちの殺気だった叱り声が重なり合っていました。不安と恐ろしさをつのらせておののきながら、トラックは悪路を走り続けました。トラックの上では一睡もできず、夜が白々と明ける頃には東京城という所に着きました。そこで前に駐屯していた部隊の家族はもう一人としていない、がらんとした官舎に入りました。

私は、何はともあれとばかりに早速おむつの洗濯を始めました。それから持参したおにぎりを食べて、腹ごしらえをしました。いくらも休まないうちに出発となりました。出発してしばらくすると雨が降り始めてきて、またたく間にどしゃぶりとなりました。道がぬかるんで泥田道になってしまい、とうとうトラックが動かなくなり、致し方なく下車して歩くことになりました。全身ずぶぬれになり、持っている荷物からも雨水がしたたり落ちてくる有様でした。歩いているうちに雨があがると、今度

は真夏の太陽がかんかんに照りつけてきて、親も子も赤黒く日に焼けてきました。

川を見つけると、一目散に走っていって、お腹がいっぱいになるように川の水を飲んで、タオルを濡らして頭からかぶりながら、また歩き続けました。子供が苦しがったり、お腹を空かして泣き出すと、「声を出すな！　匪賊や馬賊がくるよ！」と怒られ、慌てて子供の口を押さえたりしていました。とてもかわいそうでしたが、致し方ありませんでした。

夜になると、軍の倉庫のような所や壊れかけて屋根ばかり残っている建物の下などで、ごちゃごちゃと入り乱れてぶつかり合いながら休みました。夜が明けると、すぐにそこを出てまた歩きました。数日かかって、やっと鏡白湖の山奥の陣地にたどり着いたのは、八月十五日でした。

部隊長や幹部の方々が、「よく無事に着いてくれた、これから内地に帰れる日まで、みんな一緒に頑張りましょう」と優しい、親にも似た言葉で慰労してくださいました。空が見えないほど大きくうっそうと繁った大木の周りに、泥土で造った小屋が三つばかりありましたが、それが私たちのすみかでした。釘一本ない山奥で、兵隊さんたちが細い小枝を重ね合わせて、それを木の皮で編んで組み立て、それに内外から泥土を塗って壁の代わりにしてありました。しかし激しい雨が降れば、泥土が流れてしまい大変でした。

その後、虎頭の残留部隊に残っていた主人も無事にここまで戻ってきたので、私にとってはこの上ない喜びでした。主人の同僚の鈴木少尉さんはソ連軍の機関銃掃射に遭って、足を撃ち砕かれて途中

の野戦病院に入院したと聞き、驚き悲しんだものでした。鉄条網に囲まれたこの山奥の兵舎から朝夕にラッパの号音と軍歌が吹奏されていて、それが山々にこだまして、何となく気落ちしている私たちまで勇気づけてくれるようでした。私たち家族も、少しでも部隊のお役に立ちたいと思い、炊事仕事や兵隊さんたちの衣服などの繕い仕事を受け持つこととなりました。

生まれてようやく一カ月がたった純子は、この最悪の環境においても幸いに病気一つせずに、すくすくと育ってくれました。そして、無事に日本に帰れる日を迎えることだけをただ一つの望みと楽しみとして、みんなで過ごしていました。

八月十七日の朝のことでした。全員集合とのことで何事かといぶかりながら皆走って集まりました。そこで部隊長から「八月十五日、天皇陛下御自ら戦争終結のお言葉をラジオで全国民に伝えられて、日本は無条件降伏した」という日本の動きについての話がありました。将校も、兵隊も、家族も、だれもかれも皆しばらくは泣きました。今までの張りつめていたものが、突然に音を発して崩れるような気持ちに襲われて、立っていることもできずに、へたへたとその場に皆座り込んでしまいました。

このような事態になってしまったら、いつまでもこの山奥の陣地にとどまることはかえって危険であるということで、すぐに全員で山を下りることになりました。また荷物の整理が始まり、必要最小限の物をリュックサックに詰めて背負ったり両手に持ったりして、陣地を後にして出発しました。お産間近で歩けない人は、病気の人や小さい子供と共に馬車に乗り、将校は馬に乗り、家族は兵隊さん

たちと一緒になって徒歩で行くことになり、長い長い行列が続きました。途中でソ連軍の部隊と会いましたが、将校や兵隊の赤ら顔を間近に見て、恐ろしくて体ががたがたと震えて止まらなかったことを今でも思い出します。

夜になると、兵隊さんたちがテントを張って休む所を準備してくれて、乾パンや缶詰で食事もできました。通った道のかたわらには、ソ連軍によって殺された兵隊さんや負傷して動けない兵隊さん、そして病気やけがで倒れてしまって、何の手当てもされないままに死にそうになっている日本人女性などが見受けられました。しかし私たちはどうすることもできないまま、ただひたすら念仏を唱えながら通り過ぎました。その人たちにはもう死臭が漂っていて、全身に蠅やウジがたかっていて、とてもまともには見ることもできない有様でした。みんなそれぞれに大切な息子さんであり、娘さんであり、または最愛の奥さんであるのでしょうが、お気の毒でした。私たちの隊列を誘導するソ連軍の兵隊たちは、自動小銃を振り回して早く歩け、歩けと喚き散らしていました。

九月二日、再び東京城の広場に到着して、ここで部隊は武装解除されました。将校は所持していた軍刀や双眼鏡、カメラそれに皮製品などは全部取り上げられました。兵隊さんたちも、今日まで大事に担いでいた銃の菊のご紋章をナイフで削って、ソ連兵に渡していました。どんなに残念無念な気持ちだったろうと思うと、私たち家族も胸が締め付けられるようでした。戦わずして敗戦、それも相手が赤鬼のようなソ連兵では、悔やんでも悔やんでも悔やみきれない気持ちでした。女のソ連軍将校が

日本の化粧品が欲しいと言ったとかで、北浜軍医の奥さんが自分の大切にしていた化粧品を渡したということも聞きました。

部隊と一緒に日本に帰れるものとばかり思っていたら、家族だけが離されてトラックに乗せられました。しばらく走っていると、避難民収容所のような所があって、そこに降ろされました。そこは開拓団の施設で、土塀に囲まれた中には既に千人以上の人が収容されていて、皆ぼろをまとっているような姿で、後から入ってきた私たちをぼんやりとした表情で見ていました。私たちには、以前家畜の入っていたらしい小屋が与えられました。枯草を集めたり、屋根からカヤを引き抜いたりして敷物をつくり、身動きもできないような狭い所での生活が始まりました。部隊の人たちは全員、ソ連軍の捕虜として北に向かって連行されていったとのことでした。夜が明けるのを待って、あちらこちらと畑を探して、膝から下をびしょびしょにしながら野菜や野草を探しました。そのころはまだ大根や大豆などが畑に残っていたので、それを持ち帰って生のままで食べました。それからの毎朝は、露に濡れながらの食べ物探しでした。日中には、ソ連兵が赤い顔をして何やら分からないことを喚き散らしながら、そこいらに置いてある荷物を手荒にひっくり返しては、めぼしいものを探して略奪していきました。お腹の大きい奥さんは、お腹に何か隠しているのではないかと疑われて、人前で何度も真っ裸にされていて、本当に気の毒なことでした。ソ連兵は毎日のように入れ替わり立ち替わりやってきては、荷物をけ散らかして何かないかと物色していました。歯磨き粉を見つけ出して、なめたり肌に塗

ったりしていました。歯磨き粉が何なのかも知らぬ野蛮なソ連兵には、軽蔑するほかはありませんでした。

二、三日たって初めて食糧が配給になり、皆は大いに期待をしましたが、配られたのは皮付きのままの高粱でした。衰弱しきっている体には、皮付きの生の高粱では消化が悪く、皆下痢に悩まされました。入浴はおろか、顔を洗うことも口をすすぐことさえもできない有様の明け暮れに、半病人のようになり、空しくやるせない思いで過ごす毎日でした。そのうえ、昼夜区別のないソ連兵による残虐な行為に、助けを求める女性の悲しい声を耳にしても、助けに行くこともできない苛立たしさと悔しさに、我が身が震えるような気持ちになっていました。一歩も外に出ることができずに、出入口の戸を針金で閉めて、皆で身体を寄せ合う恐怖の夜が続いていました。

朝起きてみると、窓の下などそこいら中に大小便の汚物があって大変でした。向こうの土手の下に小川が流れていましたが、洗濯をする人、食器を洗う人など、川に沿っていろいろな人がそれぞれのことをしていました。私も純子の物はきれいな水で洗ってやりたいと、朝だれよりも早く起きて川に行きました。

こんなに辛い環境にあっても、純子は元気に育っていました。時々眉をしかめながら、私に何か一生懸命に語りかけるしぐさをしていましたが、それが何ともかわいくて思わず抱きすくめてしまいました。「純子の元気なうちに早く日本に帰りたい。内地に帰りたい」そればかり念じて、朝な夕なに

遙か東方に向かって泣きながら拝んでいました。

九月も過ぎると、朝夕の寒さは厳しくなりました。ここにいては皆凍死するしかないということで、収容所の役員たちの話し合いで、またぞろぞろと移動が始まりました。開拓団の人たちと合流する者、何か仕事をしなければ食べていけないといって職を探す者など、いろいろな理由を持っていました。

私たちは、三たび東京城に向かって移動して、そこの焼け残った官舎に入りましたが、外観は赤れんがの建物で以前のままの姿でしたが、内部は板切れ一枚残っていない悲惨な有様でした。元気な人は毎日、内部の補修に使えるような板材を探して歩いていました。そして何とか人の住めるような状態になりました。夜は体を寄せて暖め合って過ごしました。これからの寒さに備えて、焼け残っている建物などから燃料になる物を見付けて集めました。

十月十七日のこと、雨のざあざあと降る中を、近所の官舎を壊して薪を作っていたら、日本の兵隊さんたちが大勢通るということで、道路に飛び出しました。久しぶりに見る兵隊さんの姿に、涙が先に立ってしまい、ただ手を振るだけで声を掛けることもできませんでした。その人たちは郭化の山の中に隠れていたとのことで、皆元気の良い兵隊さんでした。私たちのみすぼらしい哀れな姿を見て、男泣きしている人もいました。手袋、靴下、タオル、石けんなどのほかに、途中で取ってきたのでしょうか、野菜なども放り投げて行ってくれました。中にはお金まで投げてくれる人もいました。護送のソ連兵は馬に乗っていて、兵隊さんと私たちが話をしてはならないとばかりに、棒を振り回して

「どけどけ」と言っていました。兵隊さんたちはシベリアからウラジオストックに行って、そこから日本に帰ると言っていました。「あなたたちも十一月中には帰れるだろうから頑張ってください」と言って励ましてくれました。

翌日もその翌日も、仕事もせずに道路に出て、次から次と歩いてくる兵隊さんを見送りました。相変わらずソ連兵は、棒を振り回しては私たちを追い払っていましたが、その間をくぐり抜けて話を交わしました。私は純子を背負って見送っていたので、わざわざ背中の純子の顔をのぞき込んでは、かわいそうにと言って泣いている人もいました。私も同胞の心の優しさと温かさには胸がいっぱいになり、後で思い切り泣きました。

次の日、私が立っている前に一台のトラックが止まり、ソ連将校と日本の将校でだいぶ年を取った方が降りられて、私を手招きするので近くに寄ったら、何か小布に包んだ物を気付かれないようにねんねこの袖に入れて、「これは私のほんの鼻紙代だ。遠慮せずに受け取って何かの時の足しに使ってくれ。頑張って日本に帰るんだよ」と早口に言われました。有り難く押し頂きながら、ちょっと待ってて下さいと言ってすぐに部隊長の奥様をお連れしました。その将校は山田少佐と言っておられ、私たちの部隊長の出村大佐を知っていますと言われました。お礼を申したり、いろいろと話してお別れしました。私は、包みの他に毛糸の手袋や、靴下、帽子なども頂きました。山田少佐は、出村部隊長の家族の命の恩人でした。後で計算したら、約五千円ほどでした。このお金があったので、チフスが

流行し困難したときもだれも死なずに過ごせました。また、満人のタイタイ（夫人）にもならずに生きることができ、餅屋を始めるときの資金にもなった尊いお金でした。

翌日も朝から見送りに道路に出ていました。思いがけず高森中尉さんが通りましたので、すぐに高森さんを呼びましたが、そのときはまだ赤ちゃんの紀明ちゃんも元気で奥さんにおんぶされ、お兄ちゃんの靖康ちゃんは手を引かれて飛んでいきました。お互いに手を取り合って、無事な姿を喜び合って泣きました。久々にご主人に会われて本当に良かったと、もらい泣きしました。それから少したつと、今度は原田准尉さんが通られ、奥さんは驚きと喜びとが一緒になってしまい、真っ青になり、口もきけなくなっていました。しばらくして少し落ち着きを取り戻し、坊やが亡くなったときのことを泣きながら話していました。私は、純子のお父さんはどこでどうしていることやらと、純子に話しかけていましたが、その言葉は次第に泣き声に変わっていたことを思い出します。

富永兵団の大部分が通って行かれました。私たちの家族のために、二百円ずつを置いて行かれたそうです。私たちのグループは貧乏で、毛布などを売って命をつないでいたので、このお金は大変に有り難いものでした。

東京城地区は、相変わらずソ連兵の乱暴、狼藉が横行していて治安は悪くなる一方でした。ある時、ソ連兵が家に入ってきて私を追いかけたのです。恐ろしくて恐ろしくて髪を振り乱して逃げ回り、慌てて純子を抱き上げたら、ここに寝ろというようなジェスチャーをしたので、無我無中で飛び出して

難民会長の所に助けを求めてかくまってもらって、やっと九死に一生を得たこともありました。毎日のようにソ連兵は入口を叩き、戸を開けようとして歩き回っていました。伊藤さんの奥さんが便所に連れ込まれたことがありましたが、そのときは皆であらん限りの声を出して叫んだので、ソ連兵は慌てて逃げて行きました。

そのころ収容所では、毎日のように作業が割り当てられて使役に出ました。落穂拾いの使役に行きましたが、天気の良い日は「ああ、純子もおんぶして連れてくれば良かった。あの冷たくて薄暗い部屋で泣いているのではないか」と思うと、心配で心配でたまりませんでした。朝出掛ける時にもかわいそうになって、なかなか手離すことができずに、今日も一日別れていなければならないのかと心の中で泣きながら、「純子よ、泣かないでおとなしくお留守をしていてね」と、頬ずりをして後ろ髪を引かれる思いで出掛けました。私たちのグループは、病気の人や赤ちゃんのいる人が多くて、丈夫だった私が出掛けなければならない有様でした。三十人ぐらいが一団となって、あちこちと夢中になって探し歩き、野菜、玉蜀黍（トウモロコシ）の茎など食べられるようなものを集めて、夕方には一目散に帰り、純子を抱っこしました。留守の間純子の面倒を見ていた人が、おむつを何回取り替えたとか、よく眠っていたとか教えてくれました。胸を広げてお乳を与えるときの嬉しさは、何にも例えられない心境でした。

寒さが加わって、木枯らしと共に白い物も混じるようになってきました。精神的にも肉体的にも疲労しきった私たちには、ますます絶望の毎日が続き、おむつを洗うにも手がかじかんで絞ることもで

きませんでした。純子のことを思うと無理をしてでもしなければなりませんでした。純子は私の生きる全てでした。

ある日の朝、起きて純子を見たら何だか様子がおかしく、熱っぽいようで動きもぐずぐずしているので心配で、部隊長の奥様に二百円をお借りして朝鮮人の経営する病院に連れて行きました。長いこと待たされてやっと診てもらったら、「大したことはない。軽い消化不良だ」と言ってビタミン注射を一本打ってくれて、薬をもらって帰りました。途中に写真屋があって、「ああ、お金があったら純子の写真を撮りたいなぁ」と思いながら、写真屋を振り返り、振り返りしていました。今思えば、あの子と別れるのだったらどんな無理をしてでも撮っておけば良かったのにと、つくづく後悔をしました。貧乏の悲しさがしみじみと心にしみる気持ちでした。

奥様に症状をお話しして、部屋に寝かしつけました。その日は炊事当番でしたので炊事場に行きましたが、仕事をしていても泣いているんじゃないか、苦しんでいるんじゃないかと考えて気が気ではなく、時々部屋に戻って見ますと、私の姿を見て目で私を追い掛けて泣いていました。「ああ、かわいそうに。純子ごめんね」と言ってはいましたが、心の中ではもう仕事なんかしたくない、そばを離れずにしっかり抱いていたいという気持ちでいっぱいでした。共同生活をしているからにはそれはできません。鈴木さんは発疹チフス、本田さんの洋子ちゃんも、宮林さんの肇ちゃんも病気で寝ていて、皆同じなんだからと自分で自分の心を励ましていました。

翌日また病院に連れて行ったところ、病気が増えて「孫悟熱」と診断されました。六十円払いました。夕方からますます苦しそうになり、せっかく飲んだお乳ものどにつかえるようで呼吸困難になりました。額に触れるとかっかっと高熱が波打っているようで熱く、タオルを濡らして冷やしてもすぐに生温かくなってしまう有様でした。次第に夜も更けてきて、真っ暗で灯りもなく、時々マッチの明かりで顔を見ると、辛さ苦しさを訴えるように悲しい声を振り絞って泣いていました。まるで「お母さん！　苦しいよ、助けて！」と言っているようでした。ああ、これほど辛いことがあろうか。代われるものなら代わってやりたい。口を脱脂綿で湿らせても、水分を飲み込むことができず、ただはぁはぁというだけで、私にはどうすればよいのかおろおろするばかりでした。「ごめんね、ごめんね。ふっくらと太って日本に帰れる日のみを待っていたのにね」と言葉をかけたが、もう呼べど叫べど目を開けませんでした。純子は私を一人残して、一人であの世に行ってしまいました。恥ずかしさも忘れて気が狂ったように泣きました。冷たくなった亡骸を抱いて頬ずりをしましたが、応えません。せめて一度、お父さんに抱っこをしてもらいたかったが、それも夢となってしまいました。その日は、忘れることもできない昭和二十年十一月二十一日でした。

少しでも寒くないようにと、たくさんの衣類に包んで、かちかちに凍りついた土を一生懸命に力をふりしぼって掘り、そこに葬りました。その辺りは、遺体が多数埋葬されていて、狼や野良犬が掘り返しては食い散らしていて、悲しく目も当てられない惨状でした。いろいろな食べ物を持ってはお参

りする毎日でした。

その頃になると、皆でごろ寝をして体を寄せ合っていましたが、体が暖まると虱が動き出して、体中傷になるほど掻きむしっていました。また、毎日のように満人がやってきて、「オーデハンズライ。チェンデユー、ショマショマ、タターユー」と叫んで、嫁さん探しにうるさいことでした。「俺の家にはお金も米もたくさんあるから来い」ということのようでした。

喜久永中尉の奥さんは、小さい子供さん一人を亡くし三人の男の子を抱えていたので、とうとう満人の家に行ったそうです。妻という立場を捨てて、母として子供を育てるための最後の手段だったのでしょうが、どんなにか辛かったことでしょう。聞くところによると、第三四七部隊の家族は、ほとんど死んでしまい、第五〇六部隊の家族は、二、三人が病院で働き、残りは亡くなったか満人の家へタイタイになって行ったとのことです。私たち出村部隊の家族は、二十人ぐらいいた子供はほとんど亡くなりましたが、女性はだれ一人としてタイタイになった人はなく、部隊長の奥様の統率のもとに、お互いに助け合って頑張って生きてきました。

私もついにチフスにかかりました。健康な人も病気の人も体を寄せ合って生活をしているので、当然のことでしょう。病気にならなかった人は一人もいませんでした。高熱にうなされて水を飲みたいという夢ばかり見ていて、四、五日は生死の境をさまよいましたが、幸か不幸か助かることができました。友達が、自分の衣類を売ってお米に替え、お粥(かゆ)を炊いて食べさせてくれたからです。そのおい

しかったことを覚えています。

十日ぐらいしてまだ体が少々ふらついていましたが、難民会の会長さんの世話で東京城公安局の炊事の仕事に行きました。日本なら、さしずめ役場と警察が一つの建物の中にあるような役所でした。朝早く皆が眠っているうちに出掛けて、薪割りをし、水を汲み、掃除をしてから二十人ぐらいの食事の用意をする仕事でした。佐藤さんという他の部隊の人と二人でしたが、皆が雪花菜（おから）や高粱を食べているときに、私たちはお米のご飯が食べられて申し訳ない気持ちで、お焦げができると握って持って帰り、次々と食べさせました。一カ月に二百円の給料をもらいましたが、それは部隊長の奥様に渡して、皆の食糧代にしてもらいました。

不安と恐怖の昭和二十年も過ぎ去り、北満にも春が訪れてくる頃に帰国の話が耳に入るようになり、喜びに胸が躍るようでした。それに加えて今ひとつ嬉しかったことは、ソ連兵が帰国し中国共産軍と交代したことでした。身に迫る危険も少なくなり、手まね身振りで中共兵とも話ができるようになったことです。出村部隊の家族で、朝鮮人が営んでいた餅屋を千円で一軒丸ごと買い取り、そこに移り住んで皆一緒になって餅屋を始めました。私は相変わらず公安局で働いていましたが、二月には給料二百十円、ボーナス百五十円をもらい、びっくりしました。

そのうち公安局の仕事もなくなったので、餅屋の仲間入りをしました。朝市に行って材料の餅米や小豆や飴などを買ってきて、皆で手分けして作り、それを一個二十銭で売りました。駅に汽車の音が

するたびに飛んで行って売るのです。そのうちに、鏡白湖で捕れたフナをフライにして弁当も作りました。だんだんと商いの範囲も広げて、お酒やたばこも売るようになりました。この駅では機関車への給水や石炭の補給をするので、停車時間が長く、食べ物がよく売れました。皆一生懸命に働いていたので、少しずつ生活にもゆとりが出てきて、石けんを買って顔を洗ったり、はぎ合わせながら衣類を作ったりしました。

私は純子を埋葬したところを掘り起こし、薪を買って日本人のおじさんに頼んで火葬にして、遺骨を肌身に着けるように衣類に縫い込みました。

やがて、千秋の思いで待っていた帰国の日がやってきました。忘れもしない昭和二十一年八月二十五日でした。私たちは、身支度をして苦労の連続だった東京城に別れを告げ、多くの人々が眠っている墓地にお参りをしてから無蓋列車に乗りました。辺りがすっかり暗くなった頃に牡丹江駅に着き、そこで降ろされて高麗小学校に収容されましたが、既に二千人ぐらいの引揚者が集まっていました。そこで二、三日収容所生活を送り、再び貨車でもう二度と訪れることもないであろう牡丹江を後にして、八月三十一日に横道河子（オウドウガシ）に到着しました。最後尾の貨車は病人専用で、大勢の病人は馬糞のこびりついた側板に寄り掛かったり、寝ころんだりしていました。その中には、別れ別れになって他の部隊に行った鈴木少尉の奥さんが、げっそりと痩せて別人のようになっていました。ご主人から「百合子、百合子」と愛されていて、坊やも生まれていたのにと思うと、本当にかわいそうで悲しくなりま

した。

九月五日ハルビンに到着し、ここで錦州までの食糧を確保するようにとの指示で、仲良しの奥さんと二人で、高粱、粟、塩、味噌などを買い集めましたが、中共軍の管轄地はここまでで、汽車もこれから先は行かないとのことで、買ってきた食糧を背負って歩き始めました。だいぶ歩くと広い野原に出たので、そこで野宿をしましたが、寒くて寒くて眠れずに皆起き出して焚き火をして過ごしました。朝まだ薄暗いうちに出発し、やっと国民軍の勢力地域に入り、そこで荷物の検査を受けて無事に通過し、松花江（ショウカコウ）を船で渡りました。奉天の一つ手前の駅で、夜中に何か騒々しくなってきたので目を覚ましたら、横に置いてあった大事な大事なリュックサックが無くなっていました。あちらこちらで泥棒、泥棒と大声で叫ぶ声がしていましたが、取られたリュックサックを探しに行く間もなく汽車は発車しました。大事な純子の形見の品や主人の写真、貯金通帳など、今までソ連兵にも取られずに私と共に苦労してここまで持ってきた全財産をなくしてしまい、腹の中が煮えくり返るような怒りと悔しさでした。部隊長の奥様が着替えにと、ワイシャツ二枚をくださいました。

九月十日、錦州にやっと着き、そこでＤＤＴを頭からかけられ、さらに予防注射をして待機宿舎に入りました。二十二日に葫蘆島から高ぶる胸の鼓動を押さえながら、引揚船のＬＳＴに乗船しました。九月二十五日の夕方、遠くに島影が見え始めてきました。皆は「懐かしい、懐かしい」と言って、甲板に鈴なりになって「おおい！　今帰ったよ！」と声を張り上げて叫んでいました。感極まって泣き

出す人もいました。私もこの喜びの日のために歯を食いしばって頑張って生きてきたのでした。故郷に純子のお骨を抱いて帰り、皆に温かく迎えられるのだと思うと夢のような嬉しさでした。

両親は、無事に元気でよく帰ってきたと抱きしめて泣いてくれました。しかし、我が家でも戦争の犠牲者はたくさんいました。すぐ上の兄は北支で、すぐ下の弟は予科練で、一番上の兄は北満で、それぞれ戦死していました。主人の弟も南方で戦死し、二番目の兄と夫はまだソ連抑留から帰されていませんでした。これほどの戦争犠牲者を出した家は、他にあるだろうかと嘆きました。しかし、天の助けか、昭和二十三年四月に兄が無事シベリアから帰ってきて、大いに喜び合ったのでした。そしてその年の十月には、待ちに待っていた主人が無事に帰ってきました。この上ない喜びでした。これも純子が守っていてくれたおかげと思い、改めて涙したものでした。

過ぎ去った当時の悲惨な有様を回顧するとき、何のための戦争だったのか、消えることのない心に残る深い深い傷跡は、平和を願う心として後世に伝えたいと思います。今は、戦死した兄弟や純子の供養をしながら、心安らかな日々を過ごしています。